

コラジェクタによるコンセプトワーク能力開発

慶應学術事業会 丸の内シティキャンパス 桑畑 幸博 (E-Mail:kuwa@keiomcc.com)

慶應義塾大学 大学院政策・メディア研究科 妹尾堅一郎 (E-Mail:senoh@miinet.or.jp)

1. はじめに：コラジェクタとは

“コラジェクタ”(商標登録)とは「プロジェクトを活用したコラボレーション」という意味の造語であり、PowerPoint 等によって論旨・論点・論脈を可視化、共有することにより『目に見える議論』を実現する仕組みのことである【1】。

この『目に見える議論』を行なうと、発言意図・内容の曲解・誤解やそれに伴う議論のすれ違い、あるいは脱線が極小化できる。また、論旨・論点・論脈が単に文字だけでなくヴィジュアルに図解され、議論が整理された状態で参加メンバーに理解・共有されるため、次の議論展開が明快になる。

さらに、コラジェクタの効果はこうした「議論の効率化」だけではない。例えばマトリクス等を活用して議論の内容を図解・再構成することにより、新たな発見や発想が誘発されやすくなる。つまり、より創造的な議論、コラボレーションを促進することができるのである。



以上の点から、コラジェクタを活用した『目に見える議論』によって、濃密なコラボレーションが実現する可能性が高まる。さらに、議論のアウトプットとしてヴィジュアルな議事録や企画書もその場で作成できるし、かつ、その質も高まるのである【2】。

慶應義塾の社会人教育機関である「丸の内シティキャンパス」(以下 MCC と略す)では、このコラジェクタを活用する能力を、ネットワーク社会のビジネスパーソンに必要な「知的基盤能力」と位置づけ、教育プログラム化し、2001年6月から展開している。

本報告では、1年間のプログラム展開を通して得

られた新たな知見、特に会議や打合せに関する点を紹介すると共に、創造的なコンセプトワーク全般へのコラジェクタ適用の可能性について考察を行なう。

2. コラジェクタ能力

コラジェクタは「プレゼンテーションソフト等のパソコン画面をプロジェクトで投影しながら議論」を行なう点では会議等に極めて有効な「ツール」である。特別な機器やソフトウェア等は必要としない。デジタルプレゼンテーションの一般的な仕組みと同様であり、既に会議に活用している企業等がいくつもある。

しかし、この仕組みを使えば誰でも「効果的・効率的・創造的議論」ができるわけではない。それはITをはじめとした全ての「ツール」と同じだ。例えば、表計算ソフトにしても、重要なのは、その数多い機能を覚えるという「知識」ではない。求められるのは、どの機能をどう使えばどう役立つかを理解した上で、実際に使いこなす「運用能力」である。

コラジェクタも同様であり、これを使いこなすためには、ツールの運用能力が必要となる。我々は実践から次の3点が運用のポイントであること、またそれはコラボレーションにおける重要点であることを知見として得る事ができた。

論旨の共有化(発言のエッセンスを抽出、可視化して議論の参加者間に共有させること)

議論の構造化(論旨間の関係性を図解して、参加者の理解を深め、かつ共有化させること)

概念の再構成(図解から新たな概念的枠組みを抽出する等、新たな論点を見だし、それを基に議論をさらに展開させること)

これらは知識として知っているだけでは実践できない。実践を通じて体験的に修得する必要がある。

3. コラジェクタ能力の適用領域の拡大

当初我々は、コラジェクタを「目に見える議論の実現によってコラボレーションを行なうためのツール」と位置づけていた。つまりビジネス現場での適

用領域は「会議 / 打合せ」を想定していた。

しかしながら、社会人教育プログラムの実践を通じて、コラジェクタ能力の適用領域が「会議 / 打合せ」の場に限定されないことが分かってきた。

受講者のプログラム修了後のインタビューで、以下のような感想が聞かれたのである。

- 会社で資料を作る際、「ひとりコラジェクタ」を使って、今までできなかった発想ができるようになった。(化学系企業：事務職)
- 「会議支援」というより「複数人での思考支援」ツールとしてコラジェクタを社内外で活用している。(情報通信系企業：SE 職)
- 会議以外でも活用できる「仕事の方法論」が身に付いた。(情報通信系企業：企画職)

確かに我々としても、コラジェクタを活用した議論を続けていくと、個人レベルでも企画力が向上する等の効果があることは経験的に感じていた。また、個人作業の企画書作成等にも日常的に活用し、これを「ひとりコラジェクタ」と呼んでいた。

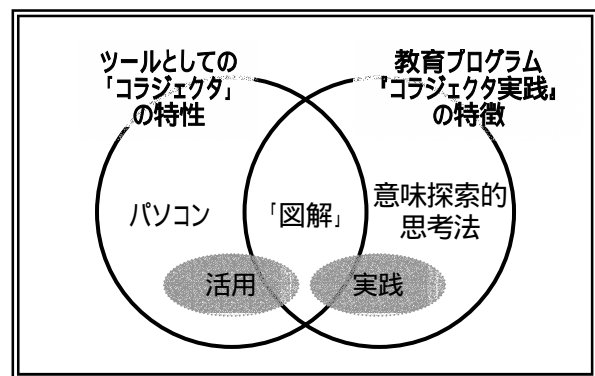
そこでコラジェクタ能力の要素を「会議 / 打合せの場」以外の領域に拡大できうるか検討を重ねた結果、複数人での創造作業である「コラボレーション」だけでなく、コンセプトや概念枠組み等を検討するコンセプトワークの作業自体に大きな効果が期待できることが明らかになってきたのである。

4. コラジェクタによる『目に見える思考』

従来のコラジェクタは、「通常は空気中に消えてしまう議論の論旨・論点・論脈を可視化・保持することにより、『目に見える議論』を実現させる仕組み」であった。しかし、その場で可視化・保持されているのは、議論参加メンバーの相互に啓発された思考の集合であるとも言えるだろう。それが前述の「複数人での思考支援ツール」というプログラム受講者の感想を導いたものと思われる。このことから、コラジェクタに、新たに「思考の構造やプロセスを可視化・保持することにより『目に見える思考』を実現させる仕組み」という意味を加えることが可能であるだろう。

5. コンセプトワーク能力とコラジェクタ

コラジェクタを用いた『目に見える思考』の実践によってコンセプトワーク能力が開発されることこの背景は次のように図解できる。



(1) パソコンの活用

- 色や形の工夫でビジュアルに図解することにより、思考の構造・プロセスの認知を促進させる。
- 手書きでは不可能なデータの再利用が行なえるので、何度でも目に見える形で思考を再構成できる。

(2) 「図解」の活用と実践

- 思考の構造・プロセスを図解という形で可視化することにより、概念的枠組みを形成できる。
- 図解で表現するために必要な、コンセプトあるいは「端的なキーワード」の抽出スキルが向上する。

(3) 意味探索的思考法の実践

- 多様なものの見方で対象をとらえる方法論を学ぶことにより、創造的思考のための「軸」を見出す能力が開発される。
- 図解を行なうための俯瞰的視座・視野・視点を意図的に変えるスキルが身に付く。

これらの点からコラジェクタは、最も創造的思考が要求されるコンセプトワークに活用できる「実践的ツール」であると共に、それを活用することによってコンセプトワーク能力を開発する「学習ツール」としても位置づけられるだろう。この能力は「考える力」であり、社会人のみならず、全ての教育に必要なものであると考えられる。

6. おわりに

今後も実践と教育プログラムの展開を通じてさらにコンセプトワークのためのユースウェア開発を進めていきたい。また、特許出願中であるこの仕組みを現在の形態(単なるパソコンとプロジェクトの組合せ)に留まらず、さらに議論や思考の支援に特化したハードウェア/ソフトウェアを開発できるかどうか、その可能性まで検討できればと考えている。

<参考・引用文献>

【1】妹尾堅一郎「IT環境におけるコラボレーション能力の開発：コラジェクタ TM による議論の可視化」、01 年 PC カンファレンス予稿集、CIEC、pp126-127。

【2】妹尾堅一郎「議論を視覚化する会議の新技術 “コラジェクタ” の全貌」、週刊ダイヤモンド、2002.1.19 号、(『情報活用術』新潮 OH! 文庫、新潮社、2002)